

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	寺田 未来
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
学習場面における自己調整メカニズムについての検討			
論文審査担当者			
主査	教授	坂田	桐子
審査委員	教授	岩永	誠
審査委員	教授	秋葉	節夫
〔論文審査の要旨〕			
<p>自己調整(Self-regulation)とは、ある目標を充足させるために自らの動機・思考・感情・行動を望ましい状態に変化させ体系的に管理する一連の心理過程を指す。本論文は、学習場面における自己調整がどのようなメカニズムで成功または失敗するのかを明らかにすることを目的としている。</p> <p>本論文は6章から構成されている。第1章では、現代の教育背景、自己調整に関する諸理論及び先行研究を展望した上で、従来の教育心理学領域からのアプローチの他に社会心理学領域からのアプローチが必要であることを論じた。さらに学習場面における自己調整の働きを規定する個人要因として、課題動機（または学習動機）と有能感（または学力）に着目する必要性について述べ、本論文の基本仮説を提示した。第2章では、日頃の学習活動を自己調整の観点から測定するための新たな尺度（学習習慣尺度）を作成し、その妥当性を確認した（研究1）。さらに、作成した尺度を用いて、公立高校に通う高校生を対象とした質問紙調査を実施し、学習動機と学力が自己調整に及ぼす影響を検討した（研究2）。その結果、自己調整に対し学力と学習動機の交互作用的影響が認められ、学力が高い場合は自律動機が、学力が低い場合は他律動機が自己調整を促す一方、高学力・他律動機と低学力・自律動機の組み合わせは自己調整のスキル形成に負の影響を与えることが示唆された。第3章（研究3）では、自己調整の限定資源モデルの観点から、課題動機と有能感が自己調整に及ぼす影響を実験室実験によって検討した。その結果、研究2と同様に、高有能感・他律動機の組み合わせは衝動抑制の低下を、低有能感・自律動機の組み合わせは目標遂行の低下をもたらすことによって自己調整資源を枯渇させる一方、高有能感・自律動機及び低有能感・他律動機の組み合わせは自己調整資源の枯渇を緩和することが示された。第4章（研究4）では、学習者の知能観の違いが自己調整における資源の枯渇あるいはその緩和過程にいかなる影響を及ぼすのかを検討した。その結果、第3章で示された自己調整資源の枯渇－緩和過程は、知能を変化可能なものと捉える増大的知能観をもつ者においてのみ認められることが示された。第5章では、自己調整が適応指標に与える影響を明らかにするとともに、自己調整と適応指標に影響を与える対人環境に着目した。研究5では、家族成員及び親密な友人からのサポート受容が自己調整を促進する過程が示された。</p>			

研究6では、家族成員の養育態度におけるケアが自己調整を促進し、過保護が自己調整の抑制と関連すること、また熟達目標構造をもつ家庭環境が自己調整を促進し、遂行目標構造をもつ家庭環境が自己調整を抑制することが示された。第6章では、第2章から第5章で得られた知見を総括し、自己調整メカニズムの新たなモデルを提唱した。さらに、本論文の理論的、実践的貢献について論じ、教育現場への提言をまとめた。

本論文は、これまで主に教育心理学領域で研究されていた自己調整学習のモデルに、社会心理学領域における限定資源モデルの観点を加えることによって、学習場面における自己調整の成功・失敗が引き起こされるメカニズムを明らかにした点で、学術的な貢献度の高い論文である。また、誰に対しても自律的な取り組みを促すことが有効なわけではなく、学習者の有能感と課題動機の組み合わせに着目すべきことを示した点で、教育現場にも有用な観点をもたらすことのできる論文として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。